

コロナ禍におけるESD実践活動としての「つなげる場」の新たな可能性 New Possibilities of “Linking Place” as ESD Practice during COVID-19 Pandemic and Chaos:

萩原 豪

高崎商科大学・上州ぐんまESD実践研究会・環境カウンセラー

概要:2020年は新型コロナウイルス感染症への対応に追われるなど、広い意味で「持続可能な社会」の構築について考えさせられる一年であった。上州ぐんまESD実践研究会では2019年度より群馬県内で環境保全やSDGsに関わる活動を展開している人たちに活動発表の場を提供し、人と人、人と活動を「つなげる」ことを影からサポートしている。しかしコロナ禍では、移動や対面式に不安を感じる人もいたため、昨年同様に実施することが難しく、対面式とオンラインでの同時中継をするに至った。これにより県内のみならず他県からも参加が可能となり、また中継や録画発表という新しい方式も実行することができ、「新しい生活様式」下での展開の可能性について検討を行った。

キーワード:環境保全活動、ESD、SDGs、オンライン、つなげる場

1. はじめに

2019(令和元)年12月8日、中国湖北省武漢市で最初の患者が発生した後、世界中に感染が広がった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、多くの人の命を奪ったと同時に、人類の生活様式さえも変えてしまうだけの影響を与え、今日に至っている。2020(令和2)年3月13日、新型コロナウイルス対策特別措置法が成立した。その後、4月7日に東京・神奈川・埼玉・千葉・大阪・兵庫・福岡の7都府県に対して緊急事態宣言を発出し、4月16日は宣言の対象を全国に拡大した。この緊急事態宣言は段階的に解除され、5月25日に緊急事態宣言は解除された。その後、COVID-19の感染状況が再拡大したため、2021(令和3)年1月8日に2回目の緊急事態宣言が発出され、これは3月21日まで続いた。

COVID-19への対応のひとつとして、世界的にインターネットを活用したテレワークが企業を中心に推し進められることになった。学校教育の現場でも授業のオンライン対応が迫られた。これは環境教育活動についても同様で、屋外での自然体験活動や集会などが軒並み中止となる事態となった。これは環境カウンセラーが関わる活動・事業についても同様であった。2019(令和元)年

度の環境カウンセラー研修は、2月下旬に開催予定だった北海道・関東・関西地区での研修を中止せざるを得なくなった。また、2020(令和2)年度の環境カウンセラー研修は、全面的にオンライン講座となり、動画配信を行うに至っている。今後、環境カウンセラーが実施の活動においても、COVID-19への予防対応だけではなく、オンラインへの対応も考えなければならない。本報告は昨年度の本学会研究大会において報告を行った「上州ぐんま市民環境保全活動発表会&交流会」(以下、発表会と略す)のオンライン対応について、その取組と課題について検討を行うものである。

2. 上州ぐんま市民環境保全活動発表会&交流会

筆者が所属する群馬県環境アドバイザー連絡協議会の広報委員会の中で、「環境アドバイザー同士の横のつながり」について議論されたことを嚆矢として、広く群馬県内で広く環境保全活動をしている人たちとを「つなげる場」として、本発表会を企画し、2019(令和元)年度は夏と冬の2回開催した。この発表会は2020年度にも開催する予定であったが、COVID-19への対応などから開催することを再検討しなければならなくなった。群馬県のCOVID-19感染状況と警戒度を鑑み、夏の開催は見送り、冬の開催の可能性を期待

して企画することになった。

10月下旬、群馬県のCOVID-19警戒度が低下したこともあり、12月に高崎商科大学を会場として開催することを最終決定した。しかし、群馬県の警戒度の変化によっては、直前になって開催中止を判断せざるを得ない状況に変わりなかった。そこで、教育機関が「学びを止めない」として進めていたオンラインへの対応を、本発表会にも適用してオンライン開催をすることが出来ないか、模索することにした。発表者も参加者も、会場までの移動中の感染を危惧する場合にはオンラインでの参加を可能とし、また最終的に会場での開催ができなくなった場合でもオンラインでの配信をすることを検討した。その結果、第3回発表会を2020(令和2)年12月6日(土)、高崎商科大学で開催すると同時に、オンラインでの配信をする、いわゆるハイブリッド形式での実施に至った。オンライン配信は会場に配信用のPC(Apple社Mac mini 2012)とスイッチャー(Blackmagic Design社ATEM Mini)を設置し、オンライン会議システムのZoomウェビナーを用いて行った。

昨年度に実施した茶話会形式の発表および対面での交流活動の場所は、COVID-19対応として設けなかった。参加者は対面・オンライン合計で120名だった。

3. 結果と考察

元々、本発表会は群馬県内で環境保全活動・SDGsに関わる活動をしている人たちが活動内容を発表することにより、お互いが交流することの場を提供することにあつた。今回、オンラインを併用することにより、従来の会場に来場して発表するだけでなく、発表者自身が会場以外の場所からオンラインで中継をする「Zoom利用型」や、事前に発表内容を録画しておき、そのデータを当日会場で放映する「録画配信型」など、発表者の自由度が大きかったことである。口頭発表12件のうち、会場発表は7件、Zoom利用は2件、録画配信は3件だった。Zoom利用では桐生市・水

戸市と中継を繋いで実施した。また録画配信では佐賀県・東京都からの発表があつた。このように群馬県内のみならず、遠方からの発表を受け入れることにより、普段あまり聞くことがない他地域の活動を聞くことは、参加者にとって新しい刺激となったと考えられる。しかし、ポスター発表については、発表形式の性格上、オンラインでの中継をすることができなかつたため、代替案を検討することが今後の課題である。

他方、ハイブリッド形式で発表会を実施するに際し、大きく2つの問題が明らかとなった。まず、遠方との中継に際して、インターネット回線の問題からか音声途切れるなどの問題が生じたことである。これは会場と発表者の配信用機材およびインターネット環境に依拠するところが大きい。どこが原因かをその場で判断することは難しく、その場での対応ができなかつた。もう1点は会場発表で用いるPowerPointの投影である。テレビ中継のように会場後方から会場のスクリーンを撮影することができれば良いのだが、会場の設備上、それができなかつたため、発表者のPowerPointをZoom経由で画面共有したものをスクリーンに投影するという方式を採った。これによりオンラインの参加者はPowerPointをはっきりと見ることができたものの、発表機材の関係から発表者自身の姿は画面上に映らず、その身振り手振りなどの状況は見ることができなかつた。

COVID-19の先行きは見えないが、環境カウンセラーも「新しい生活様式」に対応した活動を展開していくことが期待されていると考えている。その中でオンライン対応も選択肢のひとつである。そこで利用できるツールはZoom以外にもCisco WebexやGoogle Meetなどがあるが、今回のようなオンライン講演会を開催する運営側に対する資料だけではなく、発表者や参加者に対する資料不足を痛感した。今回の経験を基に、今後は環境カウンセラーに対するオンライン対応への講座や資料作成などを検討していきたい。